

「世界平和をめざす国際貢献」

講師 参議院議員 佐藤 正久氏

04年、自衛隊イラク先遣隊長、第1次イラク復興業務支援隊長を務めた“ヒゲの隊長”、佐藤 正久さん。退官後の07年に参議院議員初当選以来、外交防衛、災害対策、地球温暖化問題などで広範な活躍を展開しておられます。



● 郷に入ったら郷に従え

04年、自衛隊イラク先遣隊長として出発する直前に陸上幕僚長に呼ばれました。「佐藤、いいか。郷に入ったら郷に従え」

そのひと言だけを、陸上幕僚長は真剣な表情で私に伝えました。その時はわかりませんでした。行ってみて「なるほどな」と思いました。どれほど強い思いを持っていても、宿营地サマワとそこに暮らす人びとを愛する気持ちがむこうに伝わらなければ、結果なんか絶対に出せない、ということです。

果たして、その気持ちは伝えられたか。これについては後からお話ししましょう。

● 絶対に隊員を連れて帰って来る!

これまで自衛隊の国際貢献で、カンボジア、中東ゴラン高原そして今回のイラクと、3回現場に立ちました。最初から最後までずっとうまくいくことなどありません。「信なくば立たず」は、私の座右の銘ですが、強い思いがなければ途中でへたってしまいます。

では、戦火の中、現場に立つわれわれの強い思いとは何か。国のため、日本のためだという思いです。これ無しには、なかなか第一歩が踏み出せません。日本の石油の9割が来る中東地域、その安定のためにはイラクの安定が不可欠であるということでした。

でも、一番大きいのは家族への思いです。

イラク出発に成田空港へ家族の方々が見送りに来られました。出発時間も間近になって、あるお母さんから頼まれました。「隊長さん、最後に、息子の家族と一緒に写真に入ってください」

ところが、いつまでたってもお母さんのシャッターが下りない。指が震え、肩が震えて、とてもレンズなんかのぞける状態ではありません。そうか、ある覚悟の上の、「最後」という言葉だったのだ。仲間も皆泣きました。

何回も何回も会合を持ち、思いを強くして来たつもりです。でも、あの成田空港でのお母さんの涙に接した瞬間ほど、われわれの思いが強くなったことはないと思います。

絶対に生きて帰ってくる、と。隊長として、どんなことがあっても隊員を奥さんのもとに、お父さんお母さんのもとに連れて帰ってくる。そのためには何でもやってやろうと、私は心に刻みしました。

● 大事なものは「想定内」を増やしておくこと

そんな強い思いがあったから、がんばれたと、今、思います。少ない人数でやるのがいっぱいありました。情報も取らなければ。何もなし砂漠のサマワに宿营地をつくる土地交渉もやらなければ。クウェートから400kmかけて600本ものコンテナを運ばなければ。そんな中で、使命である復興業務支援のプロジェクト創生をやらなければならない。睡眠時間2~3時間という日々が2ヶ月も続きました。「正直に言いなさい!」

がんばる隊員に、隊長として訊きました。

「怖い!」

返事が返ってきました。あれほど訓練した自衛隊員でも怖いんです。敵が判らないんですから。テロとかゲリラは、一般市民の格好をした人が一瞬にして変わるんです。

民生支援は、住民の真ん中でやらなければ結果が出ません。道路復興の調査を始めると、すぐ30~40人集まってきます。「この道路を直すなら、むこうの病院もやってくれ。あの学校も…」

と、陳情の嵐です。

武器が氾濫する世界で、知らない人々に囲まれる。怖いんです。誰か一人が、あのダボツとした服からピストルを出して、隊員に向けたら。熱心に作業を見ている無邪気な顔をした少年がお腹に爆弾を巻いていたら。

私は、住民との信頼関係に勝る安全確保はないと考えていました。住民に守ってもらうような環境をつくらうと。その根本はまさに、陸上幕僚長が私に語った「郷に入ったら郷に従え」です。

隊員に言いました。「自分が、日本人として一番いいと思っているものを前面に出しなさい。正直? 優しさ? 何でもいい。絶対伝わるから」

握手ひとつでも、あるいは目と目を見て話をしても、本当に真剣にやれば、「この人間は本当にサマワの我々のことを考えてくれている」と、わかってもらえる、と。

でも皆さん、日本人は素晴らしい民族です。こいつを連れて行って大丈夫かなと首を傾げたような人間も、現場に放り込まれたら背筋がずっと伸びて考えます。

復興支援にしても安全確保にしても、大事なものは日頃からいかに「想定内」を増やしておくかです。決断の前に理由ある決意をどれだけ持っておくか、そういう中でやれば間違いなく通じます。

● 鳥の目、魚の目、虫の目を持って

国際貢献の現場に立つ際にもう一つ大事なものは「目線」です。鳥の目、魚の目、虫の目といわれるものです。

《鳥の目》

高いところから全体を見渡す。本当はどうなんだと、いろんな角度から考えながら、中長期的な施策を打っていきます。

《魚の目》

いちはやく潮の流れの変化を読み。戦いにおいて大事な洞察力のことです。経営者でも、この力を持つか持たないかで大きな差が出るといわれます。この度の世界不況下でも、力量の差はあきらかとなるでしょう。

《虫の目》

現場の目線といわれます。人の痛み、地域の痛みを自分の痛みと感じて、痛みを和らげるための施策を打っていきます。

現場では、この3つの目線が大事といわれます。思いを強く持ちながら、3つの目線を如何に組み合わせる結果を出していくか。それは国際貢献だけでなく、日頃の生活も同じと思います。

● 中東で大事な「5つのア」とは

自衛隊は“合言葉”を作るのが得意です。

例えば、「A B C + D E」。これは、当たり前のことを、ボーっとせず、ちゃんとやる、できるだけ、笑顔で、の意味です。

「5つのア」とは、焦らず、慌てず、あなどらず、あてにせず、あきらめず、です。あきらめずが一番大事でした、ことに中東においては…(笑)。

国際貢献で、現地に結果を与えるには、絶対あきらめては駄目です。ましてや、アラブの人は日本人と違います。

「I B M」のIは、インシャラー(神の思召しのままに)。Bは、ブクラ(明日)。Mはマレーシ(気にするな)です。むこうの人と交渉します。約束した日に待っていても来ない。電話で確認すると「ブクラ」です。次の日、持ってはきた

ものの約束したものと異なったり、数量が違ったりしても「マレーシ」です。取り返しの付かない失敗をしても、「インシャラー」、これは神の決めたことだ、俺の責任じゃない、と(笑)。

こういった合言葉を仲間内で使いながら、結果を出すために思いを伝えていきました。

● おれたちもがんばって日本みたいになるよ

おかげさまで、我々の7ヶ月の勤務は、ある程度の成果を残して次の部隊にバトンを渡すことができました。帰る直前に、ある部族の長に言われました。「佐藤、お願いがあるんだ。日本へ帰らないでくれ。残って、サマワの町を一緒に再建してほしい残ってくれ」。50度を超える炎天下、一瞬の死と隣りあわせて復興支援に投じた我々の気持ちは通じたと確信しました。「我々の力だけではないな。日本人でよかった。日本人の先輩に感謝だな!」

ということでした。むこうの人々は、日本人というだけで、少しはゲタを履かしてくれます。

ひとつは歴史で、「小さな日本は、日露戦争で大国ロシアに勝った。すごいね!」

このことが、彼らの民族主義に火をつけたともいわれます。

また、第二次世界大戦後の荒廃から復興を成し遂げ、更には世界第2位の経済大国になった。おれたちもがんばって日本みたいになるよと、日本とイラクをダブルさせる人もいました。

イラン・イラク戦争で撤退するまで、共にイラクの近代化に力を尽くした数多くの日本人がいました。その恩を忘れない人たちがさまざまな情報をくれて我々を守ってくれたのです。車で町中を走っていると、突然そういう人が走り出て、「佐藤、止まれ!」

Uターンをし、すんでのところまで事なきを得るということがしょっちゅうでした。

このようにして、我々は日本の皆様の善意を遠いイラクに届けることができた、今回お話できたことに感謝します。

<完>

記念合同演奏会

大会の最後を飾る「記念合同演奏会」では、『陸上自衛隊第一音楽隊・在日米陸軍軍楽隊』によるダイナミックな合同演奏で観客を魅了しました。

